

センセーション小説と「秘密」

橋野 朋子

本発表では、「推理と小説：シャーロック・ホームズが生まれるまで」と題したシンポジウムにおいて、1860年代に一大ブームを巻き起こしたセンセーション小説に焦点を当てた。とりわけ、本ジャンルの要とも言える「秘密」という要素に着目し、その語りの工夫と構造、さらに文学作品としての評価のありかたについて考察を行った。

センセーション小説が文学研究の対象として注目される契機となったエッセイ 'The Lighter Reading of the 1860s' において、Kathleen Tillotson はセンセーション小説を 'the novel-with-a-secret' (xv) と称している。また Lyn Pykett は、センセーション小説の完成度は物語の中核にある秘密が徐々に明かされていく過程にかかっていると指摘し(5)、'The narrative structure and methods of narration of sensation novels are organized around concealment and the prolongation of mystery and suspense in a kind of 'narrative hide-and-seek'.' (37) と述べている。すなわち、秘密のほのめかしと、その段階的な開示が、センセーション小説におけるプロットの核心を成していると言える。このような語りの手法に関して、Wilkie Collins は *The Woman in White* (1860) に先立つ *The Dead Secret* (1857) において、物語の「秘密」を最後まで伏せるのではなく序盤でほのめかす技法を用いたことで批判を受けた。しかし、同作の再版本の序文において Collins は 'After careful consideration, and after trying the experiment both ways, I thought it most desirable to let the effect of the story depend on expectation rather than surprise.' (X) と反論している。

とはいえ、センセーション小説における秘密の隠蔽と謎の解明の先延ばしは、しばしば語りにぎこちなさをもたらす。たとえば、Laurence Jones は、Thomas Hardy の最初の出版小説であり、センセーション小説的手法が見られる *Desperate Remedies* (1871) において、描写が恣意的に省かれたり、場面の一部が読者から意図的に遮断される例が随所に見られることを指摘している(45)。同様の手法は、Mary Elizabeth Braddon の最初のセンセーション小説 *The Trail of the Serpent* (1861) にも見られ、作中では突然、'there is no occasion for the reader to know what it is just yet' (303) というナレーションにより登場人物の会話が遮られる場面がある。このように、すべてをあるがままに描くわけにはいかないセンセーション小説においては、全知視点の語りには限界が生じ、語り手があえて情報の一部を伏せることによって語り手としての信頼性が揺らぐ場合がある。Jones は、語り手が読者を意図的に惑わせているという印象を避けるためには「限定的な視点」が必要であり、謎を解こうとする登場人物の制約ある視点から語られことによって、読者もその発見の過程を追体験することが可能となると論じている(45)。Patrick Brantlinger もまた、そのような語り手の道義的ジレンマが、作品内において探偵的役割を担う人物の登場を促したと述べている(16)。とはいえ、*Lady Audley's Secret* (1862) において、探偵的役割を担う Robert Audley が、旅行カバンに二重に貼られたラベルのうち、上側の 'Lucy Graham' と記されたラベルを水で湿らしたスポンジで擦りながら剥がし、その下に 'Helen Talboys' の名前を発見する場面では、それまでロバートの視点で描かれていた描写が、突如として、Robert の肩越しに中身を覗きこもうとする別の女性の視点へと移行する(238)。その結果として、Robert がラベルの下に何を見たのかという肝心の情報は、読者に明かされない。ここでは、読者が探偵的役割の登場人物と発見の過程を共有する構造は成立せず、語り手に語らせる作者によって情報が恣意的に遮断されている点に変わりはない。

Pykett は 'the most effective sensation writers developed techniques of narrative concealment and delay or deferral' (5) と述べているが、Collins が *The Woman in White* で用いた複数の語り手による証言形式は、情報操作が語り手個々の視点に由来するものであることを強調し、作者による恣意的なコントロールという印象を巧みに回避する手法であったと言えよう。*Dublin University Magazine* は Collins を 'a painstaking manufacturer of stories' と称し、ある程度は展開を予測できるにもかかわらず、物語の終盤まで巧みに謎の核心に迫らせない構成力を高く評価している(200)。また、*The Spectator* はセンセーション小説の流行に批判的な立場をとりながらも、'*The Woman in White* was endurable simply because the mystery to be unravelled was of its kind perfect.' と述べ、さらに 'there is not the slightest probability that the swarm of imitators will construct plots nearly so good' (1428) と、Collins のプロット構成の卓越性を認めている。

一方で、センセーション小説に対しては、プロット偏重によって人物描写が犠牲になっているという批判も少なくなかった。*North British Review* は、Collins を 'Mr. Collins can hide a secret better than any man, he is a master of mystery' と高く評価しながらも、'once the secret is discovered, when once the mystery is unravelled, his books collapse at once, their interest perishes' と述べ、謎解きが終わると同時に作品の魅力が失われる点を指摘している(183)。このようなプロット重視の姿勢に対する批判は、当時の文芸批評に広く見られる傾向であり、現実離れした人物設定や、あり得

ない状況構成がしばしば否定的に論じられた。たとえば E. S. Dallas は *Lady Audley's Secret* の書評において、センセーション小説作家について、'the novelists have seldom been able to conjoin much analysis of feeling with much analysis of plot' (4) と述べている。こうした「プロットに人物描写が犠牲にされている」という批判に対し、Collins は *The Woman in White* の第二版の序文において、'it may be possible in novel-writing to present characters successfully without telling a story; but it is not possible to tell a story successfully without presenting characters' (32) と述べ、小説において登場人物を描くことは物語を語ることと不可分である点を強調している。また、晩年の作品 *Heart and Science* (1883) の序文でも、'It has been my chief effort to draw the characters with a vigour and breadth of treatment, derived from the nearest and truest view that I could get of the one model, Nature,' (37) と述べており、人物描写に対する批判への強い自覚が読み取れる。一方、*Desperate Remedies* においてセンセーション小説的作風を試みた Hardy もまた、そのセンセーションナリズムとプロットの過度な複雑さを酷評されたが、*The Early Life of Thomas Hardy* (1891) によると、*Desperate Remedies* は 'write a story with a plot' という George Meredith の助言がもたらした「不幸な結果」(85) であり、メロドラマ的要素は彼本来の作風には適合しないものであったという (112)。Hardy は 1888 年に記した覚え書きの中で、小説におけるセンセーションナリズムを「身体的 (physical)」なもの「精神的 (psychical)」なものに分類し、次のように述べている。

A 'sensation-novel' is possible in which the sensationalism is not casualty, but evolution; not physical but psychical. . . . The difference between the latter kind of novel and the novel of physical sensationalism — i.e. personal adventure, etc., — is this: that whereas in the physical the adventure itself is the subject of interest, the psychical results being passed over as commonplace, in the psychical the casualty or adventure is held to be of not intrinsic interest, but the effect upon the faculties is the important matter to be depicted. (268)

すなわち、Hardy の関心は、出来事そのものではなく、それが人物の内面に与える影響であり、*Tess of the d'Urbervilles* (1891) に見られるように、「秘密を隠さざるを得ない」という社会的状況や、それが登場人物の精神に与える影響、そして秘密の暴露・露見のもたらす帰結こそが主題であったと言えるだろう。

Brantlinger は 'What is 'Sensational' about the 'Sensation Novel' の冒頭で次のように述べている。

Even though "sensation novels" were a minor subgenre of British fiction that flourished in the 1860s only to die out a decade or two later, they live in several forms of popular culture, obviously so in their most direct offspring — modern mystery, detective, and suspense fiction and films. (1)

センセーション小説は同時代設定を基盤とし、当時の新聞報道が取り上げるスキャンダラスな事件と共鳴しつつ、謎解きや秘密の暴露を中心とした「プロット重視」の構成によって読者を惹きつけ、一大流行を巻き起こした。そしてその文学的価値をめぐっては大いに議論を呼びながらも、「語り」の工夫や、サスペンスを生む技法は、後の推理小説やサスペンス文学に多大な影響を与えることとなった点は、特筆に値する。

参考文献

- Braddon, Mary Elizabeth. *Lady Audley's Secret*. 1862. Edited by David Skilton, Oxford UP, 1987.
- . *The Trail of the Serpent*. 1861. Edited by Chris Willis, Modern Library, 1987.
- Brantlinger, Patrick. "What is 'Sensational' about the 'Sensation Novel'?" *Nineteenth-Century Fiction*, vol. 37, no. 1 (Jun., 1982), pp. 1-28.
- Collins, Wilkie. *The Dead Secret*. 1857. Alan Sutton Publishing, 1986.
- . *The Woman in White*. 1860. Edited by Julian Symons, Penguin Books, 1985.
- (Dallas, E. S.) "Lady Audley's Secret." *The Times* (18 Nov. 1862).
- Hardy, Florence. *The Life of Thomas Hardy*. (*The Early Life of Thomas Hardy, 1840-1891*, Macmillan, 1928, and *The Later Years of Thomas Hardy, 1892-1928*, Macmillan, 1930) Studio Editions, 1994.
- Jones, Lawrence O. "Desperate Remedies and the Victorian Sensation Novel." *Nineteenth-Century Fiction*, vol. 20, no. 1 (Jun., 1965), pp. 35-50.
- Pykett, Lyn. *The Sensation Novel: From "The Woman in White" to "The Moonstone"*. Liverpool UP, 1994.
- Tillotson, Kathleen. "The Lighter Reading of the Eighteenth-Sixties." Introduction to Wilkie Collins, *The Woman in White*. 1860. Edited by Kathleen Tillotson and Anthea Trodd, Houghton Mifflin, 1969.
- "The Enigma Novel." *The Spectator* (28 Dec. 1861).
- "Novels and Novelists of the Day." *North British Review*, 38 (Feb. 1863).
- "Recent Popular Novels: *The Mill on the Floss*, *The Woman in White* and *Lavinia*." *Dublin University Magazine*, 57 (Feb. 1861).